

一

胸からもれ出る歌を歌う。空は晴れていて、
そとで動いていると汗がしみ出した。同じク
ラスの生徒があちこちで蠢^{うご}めいている。草を
抜き、ごみを拾う。小さな歌は抑揚^{よくよう}を含んで
胸^{かえ}に還る。

「みいちゃん」

呼ばれたので振り返ると多恵^{たえ}がいた。多恵^{たえ}
が口を開こうとした足元に空缶^{あきかん}が飛んで来て
二人は惴栗^{びくり}とする。

「それも片付けといてよー」

クラスの男子だった。運動場を、清掃する
時間なのに、缶を投げ付けてヘラヘラ笑って
いる。先生も注意しない。憎しみが湧^わいた。

「嫌だよね、ああいうの」

多恵たえが言うので頷うなず突つく。文香ふみかの歌は愚茶ぐちや々々ぐちやになつた。

チャイムが鳴つて、みなが集合する。熱心に掃除した人も、してない人も、整然と並ぶ。

川沿いを歩いて帰るのが、好きだった。五時になると、「夕焼け小焼け」が町中に流れる。文香ふみかは曲あわに合せて歌つた。

夕焼けは川を、緑を、文香ふみかを、赤く染めた。世界は美しくしかった。文香ふみかは歌と夕暮ゆうぐれの中で安堵あんどした。

「うるせえ」

川のベンチに寝転ねころんでいたおじさんが遠くから怒鳴つた。文香ふみかは惴栗びくりとして小さく頭を下げた。心臓の鼓動が無暗むやみに自分を追おい詰つめるので、口の中で又また歌つた。

一一

家に帰ると、母が莞爾にこにこして待つていた。

「お帰り」

言うので答える。

「只今」

「文香ちゃん、文香ちゃん、ちよつとこれ見てよ」

居間の椅子に座らされる。机には種々の資料が広がっていた。

「まだちよつと早いんだけどね、お母さん色々調べて見たの。いい高校って本当にたくさんあるのよ。ほら、今は情報公開とかもされてるから、授業内容とか教育方針なんかに共感して行くのが当り前みたい。まずここだけど、この学校はね」

文香は真剣に聞き、頷突いた。しかし、文武両道や、奉仕の心、自主独立の精神など、分らない、具體的な想像ができない言葉に中ると、悩んだ。母は悩む文香に頓着なく説明を進めていく。

「ここの高校の写真、ほら見て。生徒みんなが楽しそう。行事もいっぱいあるみたい、

文香歌々々の好きでしょ？ 合唱コンクールとか文化系の行事に特に力入れてるみたいね。とても伝統のある高校で」

「写真」

母が言うので写真を見た。沢山の生徒が笑っている。

「写真、写真の、見えない所」

母は文香の言葉を待った。

「見えない所でも、みんな、笑っているのかな」

「文香。大丈夫よ、みんな笑ってる。それに、文香も、この中に這入ればいいのよ。自分から楽しいことに飛び込むの。自分から笑うの。そうすれば、吃度、大丈夫」

文香は母が悲しそうに笑うのをじっと見た。

三

塾の時間だった。文香はそのことを知って

いた。教室の中を想像すると、沢山の生徒が並んでいて講師の話しを謹聴している。ノートを這う鉛筆の音が響く。不愉快な其音は文香の頭を這う。

其中には多恵もいた。多恵はじつと耳を傾むけ、手を動かす。多恵は講師を熱心に見る。

文香は川のそばにあるベンチに座っていた。もう日は落ちた。等間隔に置かれた街灯が夜を照らす。川沿いの道はジョギングする人も多くあり人通りは絶えない。文香は自分の腕を抱き、項垂れた。長い黒髪がさらりと流れる。

川を見ていたかった。川は暗くて見えない。然し川を見ていたかった。幅の広い川は、静やかで、時折魚の跳ねる音がする。

「みいちゃん」

声のした方を向くと、多恵がいた。

「たえちゃん」

「やっぱり、ここにいたんだね。塾、来てなかったから」

「私」

「ううん、いいんだよ。となり、座るね」
二人は黙って座った。夜は美しく、暗いのに、川の対いに広がる建物の明りが夜を乱す。汚す、文香は抵抗しなかった。壊したかった。歌い出そうとすると、多恵が喋舌った。

「今日も、諸星先生かつこ好かつたよ。諸星先生の授業すごくわかりやすく、面白いよね。私、授業の後、質問しに行こうと思ったんだけど、又真実ちゃん達がわらわら集つてさ、聞けなかった。みんなの先生なのに、勘違いしてるんだよね。『先生彼女いるんでしょ』って今日も聞いてたよ。先生はぐらかしてたけど迷惑そうだったな。みいちゃんも、塾来なよ。私一人じゃさみしい」

「私、は」

文香はうまく喋舌れなかった。塾に行かなかったことが母にばれたら、悲しい顔をするだろう。夫は分っていた。

「いや。いやに、なるの。行く所を想像す

ると。並んでる、自分を想像すると。だから、足が、動かなくて、ごめん」

「うん、その気もち、分るよ。私も行く前凄く嫌だなあって思うもん。でも、行つて見るとね、諸星先生もいるし、結構早く時間すぎちやうよ。あんまり何回も行かないと勉強遅れちやうしき、じゃあ、次は一回、一回だけ行こうよ。一所にさ」

文香は頷突いた。多恵が優しい気もちで左右言ってくれることも、分つていた。自分がさみしい気もちと、優しい気もち、どっちが大きいだろう。想像して文香は夜に埋れたくなった。

四

文香は旨く喋舌ることができなかつた。考えたことが、頭の中を馳け巡るので、夫を攫むことができなかった。攫めないの、舌へ届けることができなかった。

男子は其事を嘲弄つた。

「わたし、私は」

一人が文香の真似をしどつと笑う。クラス全体が笑っていた。文香は目を俯せ耐えた。

言い返す言葉は身を潜めた。

教室にいる、一人、一人が、黒い布を纏っている様だった。教室全體にさえ、黒い幕が掛けられていた様に見えた。夜とは違う黒い色。美しくさの感じられない、醜くい色。

文香は黒の世界から逃げた。走る。チャイムが聞える。次の授業が始まる。教室を出る前に、瞬間見えた、多恵が浮ぶ。多恵は自分の席に座り、申し訳なさそうな、悲しそうな目で逃げる文香を見た。ごめんね、ごめんね、文香は多恵に詫まった。もしかすると、声に出していたかもしれない。呼吸が乱れる。

痩せ細った文香は体力がなくすぐ走れなくなった。昇降口の所で下駄箱に手を突きああああと叫ぶ。叫ぶのに憎しみが出ていかない。黒い気もちが垢汚つく。体力だけが奪

われる。声が掛けられた。

「何やってる」

体育教師の増田だった。増田はがっしりしていて背が高く、文香が二人いても足りない位大きい。増田はぎよろりと文香を見た。

「関根、授業始まつてるぞ」

文香は荒れた呼吸で増田を見た。睨む様な目で、暗い酸素が消えない。増田は頭を掻いた。

「保健室行くか」

文香は答えなかった。隙があれば、逃げる積りだったが、まず逃げられないだろう。増田は又頭を掻いた。

「行かないなら、教室に連れて行く。わかるか」

文香は頷突いた。大人らしく、増田に蹴がう。廊下を歩いていると、体育の授業で騒ぐ生徒の音が聞えた。耳に障り、埃の様に、心に積る。

増田が教室のドアをノックし、開ける。

「関根」文香に這入る様促がす。文香を見留めた担任の長沢は迷惑そうに顔を歪める。席に着くまでくすくすと笑う声が教室を盈たした。文香は呼吸を静めるため、胸を強く掴んだ。

五

歌う、というよりは叫んでいた。自分でも、何と言っているのか分らない。文香は布団を頭まで被り、有らん限りの力で布団を握った。笑う誰かの顔が浮ぶ。笑う誰もの声が響く。打ち消すために、殺すために必死だった。しかし殺されていくのは自分である様に感じた。文香が歌うのは誰かの歌でなく、自分の歌だった。胸に訪ずれた言葉や抑揚を其儘歌った。歌は醜くく支離滅裂だった。文香はノートに詩を書き殴った。

苦しい 苦しい 苦しい

救え救え誰か私を救え

叫ぶの全部壊れるまで

憎しみや、怖れ、悲しみを、文香は其儘歌った。左右しなないと出て行かなかつた。なのに、出て行かないのが、ふしぎだった。感情は、出て行って、出て行った端から又生れるのか、出て行かずに留まり続けているのかさえ、分らなかつた。

歌は布団の中で、矢張り糸かしか出て行かず、文香を包囲した。布団の中の、暗やみ、圧迫感、籠った声は、文香の胸を縮つと締めた。息が苦しかつた。空気が足りなかつた。だから歌うのに、息苦しさは増した。

世界を切り裂く為に歌っていた。切り裂けば青い空が見えると信じた。叫びはのどを痛め、咳き込んでつばが毀れた。

雨の音がやんだ。窓を開けると、もう殆ん
ど降っていない。文香はそとへ手をのばした。

文香の室は二階にあり、眺めると、同じよ
うな高さの一軒家が立ち並んでいる。時々
マンションも見え空を威す。文香の家から川
までは歩いて五分程だったが、方角が違うの
で室からは見えない。

夕暮が近かったので、出かけようと思った。
階段を下りると、台所にいたらしい母がパタ
パタと音を立て顔を見せる。

「どうしたの」

莞爾として言う。

「そと、出てくる」

「どこ行くの」

どこという宛もなかったが「川」とだけ答
える。

「暗くならない内にね」

母が言うので頷突く。母のように、いつも
ニコニコしていられたらと思う。

今日は日曜日だった。小学生が大声で燥然^{はしや}ぎながら馳^かけていく。一、二、三人。最後の男の子は足が遅いのか、随分^{ずいぶん}遅れていた。自分が小学生だった時のことを思い返す。何も出てこない。「待つてよ」切^きれぎれに訴える男の子の声が、文香^{ふみか}の胸を螫^さす。

川の兩岸は、緑が豊かで、丈^{たけ}の高い草が並ぶ場所もあった。サイクリングロードや、ここからは離れているが野球などのスポーツができる場所もあり、常にある程度の活気がある。川の幅は広く走り幅跳びの選手が飛んでもとても飛び越せないだろう。川に沿^そっていくつもベンチが据^すえられており、家のない人達が休んでいることもある。

文香^{ふみか}はこの川が好きだった。県境^{けんざか}にある此川^{この}は、静かで、どこまでも流れていく。いつまでも流れている。川を見ていると時間を忘れた。

小さな声で歌っていた。川を見ながらだと、穏^{おだや}かな気分が歌えることが多かった。雨上

がりの川は、草木は、美しくかった。輝かがやいた。文香ふみかの頭うつは美しくいもので盈みたされた。

「すごい、上手」

声おどに驚おどろくと、女の子が目を丸くしていた。

文香ふみかの中学の制服を着ていた。

七

目が大きく、鼻筋はなすじが通って、顔の小さい女の子だった。長い髪を、右と左それぞれで束たばねており、色は明るい。手を口あに中あてて大袈裟おおげさに披ひらいていた。

「歌、上手ですね」

言うときと隣となりに座あった。背あまは余り高くないが、指も、腕あしも、脚あしも長く、笑った顔はともかわいらしい。文香ふみかは戸惑とまどった。

「どこかで、歌習うたってるんですか」

文香ふみかは首を振った。

「うう、ん」

「あ、そうなんですか。私、ピアノ習ってるんでうまいとか下手とか結構分るんですよ。友達とカラオケ行って、声だけよくてチヤホヤされてる子見ると、『音外れてるよ!』とか思っちゃうんですよねえ、あ今関係ないか。私、第一中学なんですけど、失礼ですけど中学生ですか」

「私も、第一中学」

「え! 何年生?」

「二年」

「じゃあ先輩じゃないですか! 私、一年二組の樋口空亜空といっています。よろしくお願ひします」

突然頭を下げるので、慌てて文香も下げる。相手は不思議そうな顔をしていた。

「あの、お名前聞いても?」

「あ、私、関根、文香。よろしく、お願ひします」

「はい、よろしくお願ひします。そうかあ、先輩だったんだ。なんか嬉しい」

無邪氣に笑う空亜空は美しくしかった。笑顔に打たれる一方で、文香は戸惑っていてもいた。まず、他人に是程突然距離を詰められた経験がなかったし、歌のことをほめられた経験もなかった。文香は赧れるというより、戸惑った。

「よく、ここ来るんですか」

「うん」

「そっか、私も時々来るんですけど、気付かなかったな。と言っても、私中学校から此地引越して来たんですけどね。先輩は昔しから此地ですか」

「うん」

「そうかそうか、いいことを聞いた。じゃあ、今度案内して下さいよ。学校で会ったら仲好くして下さいね。またここ来てもいいですか？」

「うん」

「やった！　じゃあ文香さん、握手々々」
「怯々々と手を差し出すと、空亜空は激し

く上下に振った。笑いながら手を振って去って行ったが、夕日を浴びて輝やく空垂空が、しばらく文香の目の中に残った。

八

「せんせ」

多恵が弾んだ声を出す。「はい」室の奥から声が聞える。ついで物と物とが打衝った音がする。

「あいたつ」

声が聞えて多恵が大きく笑い出す。文香の位地からでは多恵で隠れて何が起ったのかわらなかつた。

「あいたたたた」

春江先生が膝を擦々りながら笑って出てきた。

「もーたえちゃんが突如呼ぶから打衝かつちやつたわよ」

「私のせいじゃないですよー」

多恵がケラケラと笑う。二人は音楽室に来ていた。

きょうは是非にも塾へ行こうと多恵が誘うので、文香は頷突いた。但塾までにはまだ間があつた。すると音楽室に行つて春江先生と話していようと多恵が提案をした。

音楽を教えている春江先生は、めがねをかけていて、ふくよかな身體をしている。身體通りおっとりしていて、内気な多恵も春江先生には心を許しているようであらうに笑つていた。

音楽室にはいくつも小部屋があり、三人は其内の一つへ這入つた。

「何、今日はまた塾？」

「はい、そうです」

「塾の前だけじゃなくて、部活の日にちゃんと来なさいよ。あなたも合唱部員なんだから」

「へへへ」

多恵は笑つてごまかす。「ね」と文香を捲

き込むので、取り敢ず頷突く。

「文香ちゃんからも言って上げてよ。週に二、三回ある内、全部来ることなんて滅多にないんだから」

「そんなことないけどなあ。ねえ、みいちやんも合唱部入ろうよ。左したら私毎回来るよ」

「あら、部員が増えるのは私も嬉しいけど」
話しの矛先が突然自分に向いたので文香は驚ろく。「わた、私」反吐戻と答える。

「冗談よ。気にしないで文香ちゃん。突然ごめんね」

「そうそう、みいちちゃんごめんね。あ、そうだ先生聞いてよ」

二人が話し始めたので、文香は立ち上がった。室には楽器や楽譜が沢山置いてあって、其一つを文香は目繰る。「夕焼け小焼け」がのっていた。五時になると流れる其音楽を思い出す。文香は歌った。

夕焼け小焼けで 日が暮れて

山のお寺の 鐘が鳴る

おててつないで みなかえろう

からすといっしよに かえりましよ

納得がいくまで、くり返して歌った。いつまで経っても、納得はいかなかった。狭い此室には狭い窓がある。唯さえ狭い其窓は、置かれた楽器によって更に狭められている。どこかへ帰る歌。帰れない狭い室。だから納得がいかないのか考えた。

慣れた二人は文香に頓着せず喋舌り合っていた。文香が歌うのをやめ、話しに一段落が着くと、

「文香ちゃんは、歌うのが好きなのね。そのことだけは分るわ」

と言って春江先生が笑みを向けた。

少し呼吸をすると、心が落ちついた。空は青く晴れている。まばらに浮ぶ雲が美しくい。

文香は駅のホームで空を見上げていた。母と買物へいく。もう夏が近いから、服買いに行きましようと言った。文香は服が好きだった。すてきと思う洋服に出会えるときどきした。

電車は夫程込んでいなかった。母と並んで座り揺られる。文香はどことなくおち着かず右顧左眄した。右にも左にも人がいる。大きい人、小さい人、若い人、年配の人、色んな人が座り立っていた。太陽が眩しくて目を細める。

対いに座っていたお兄さんが立ち上り、目の前のお姉さんにどうぞと身振り席を譲る。お姉さんは「ありがとうございます」と恥ずかしくそうに席に座る。かばんにマタニティマークがついていて妊婦さんだと分かる。お兄さんは莞然ともせず会釈だけして別の車両に移っていった。

「あのお兄さん、髪は真っ赤で派手だけど、偉いわね」

じっと凝視していた文香に気づいた母が言う。

「すてきね」

母が笑うので文香は首が折れそうな勢いで何度も頷突いた。心に暖たかな水が湧く。身軀にも日が当り暖たかになる。

駅が近付く。はしゃいだ文香は電車のドアに貼り付き開くのを待つ。本当にいい天気だった。後ろにいる母は微笑む。

ドアが開くと、ふくよかなおばさんが突進して来た。文香に打衝かり文香は踉蹌く。母が驚ろいて支えた。おばさんは急いで席に座り「暑い暑い」と汗を拭いた。

降りると当った右腕を押えた。黧れてもげるかと思った。暖たかな水は黒く染まる。母が右腕をさすってくれる。

駅のホームにはごみ箱が設置されていた。自分と同じくらいの年の男の子が「シュート」

と叫んでごみを投げる。ごみは入らずホームに転がった。一緒にいた男の子達が「へたくそ」と笑ってどこかへ行ってしまおう。

行って仕舞う、どこかへ行ってしまおう、文香はぶつぶつと独語いた。男の子達が見えなくなる、母がごみを拾ってごみ箱へ入れた。文香を見て困ったような、悲しそうな顔で笑う。文香は手を噛んでいた。痛みは何も齎らさなかった。だから強く噛んだ。醜くい儘、どうして生きられる。文香は醜くさのことと、醜くさを憎む強い気もちのことを、言葉にできなかつた。

母が口の中から手を外し、歯の痕がついた手の甲をさすってくれる。先きと同じ顔で笑んで何も言わない。母の手が糸かな凹凸をなぞり、変らず太陽が輝やく。

電車が通過する轟音が突然響いて文香は惴栗と怯える。

文香はお店でワンピースを試着した。淡い緑の花が沢山絵描かれていて、細っそりとし

た作りになっている。文香は鏡に映った痩せた手足と、突き出た鎖骨、髪黒と白い肌とをじっと見詰めた。

十

文香と多恵は並んで廊下を歩いた。きのう塾へ一緒に行った時、諸星先生と五分程二人で話せたのが余程嬉しかったらしく、多恵はくり返して喜びを語った。文香はすぐ後ろで居心地悪く控えていたから会話の内容も分っていたが、真剣に聞いて頷突くことで合鍵を打った。

「文香さん！」

突然聞えた声に二人は驚ろく。振向くと空亜空がいた。

「あーやつと会えましたね！ 私、廊下きよろきよろしたりしてよく探してたんですよ、やっぱり学年ごとに階が違々と会わないもんですね。今、どこ行ってたんですか、家

庭科？ 私これから理科の実験なんですよーだから三階にいるんですけど。最近川行ってますか？ 私あんまり行けてなくてー行った時には文香さん探してるんですけど、見つからなくてさびしい思いしてるんですよ。あごめんなさい私ばかりしゃべっちゃって。えつと、私樋口空亜空と申します。文香さんのお友達ですか？」

多恵は面食らいながら「富川多恵子です」と自分を紹介した。多恵が愛想笑いをするのに、空亜空は満面の笑みを見せた。

「この前、文香さんとお会いしまして、お友達にしてもらいました。どうぞよろしくお願いします。いけないこんな時間！ 引き止めちゃってごめんなさい。実験の準備始めなぐちや怒られちゃう。じゃあ文香さん又」

去ろうとするので文香は咄嗟に手を振った。くるりと向いた空亜空がもう一度こちらを向くので文香は更に驚ろいた。

「あ、文香さん明日川行きます？ 私四時

頃行くつもりなのでよかったら」

にこっと笑って手を振りながら去って行く。待ってくれていた友達に「ごめんねー」と言っ角を曲がって行く。二人の心臓の鼓動は早まっていた。

「すごい子だね」

顔を見合せた多恵が言った。

「明るいというか、勢いがすごいというか」

残された二人はまわりに見られている気がしてなんだか恥しさが湧いてきた。時間もなかったので急いで教室へ戻る。道中多恵が独語く。

「ずいぶんきれいな子だね」

なぜか言葉に棘を感じて、文香はチクリと身軀を刺された。

十一

文香は学校が終り、塾に行くまでの間川にいた。空垂空に言われたからということもあ

る。多恵はどうするかと思っただけ言われた。
「私は、いいかな。あの子ちよつと苦手だし。今日は部活出てから行くね」
文香は頷突いた。緩くり歩いて川へ向う。
一瞬、「関根さん、テスト落ちてたよ」と言
って出来の悪い小テストの答案を渡された時
の、クラスメイトのニヤニヤした顔が思い浮
ぶが、首を振って打ち消す。落ちていたので
はなく、文香が席を離れた時に取られたのだ
けれど、出来が悪いのは自分のせいだった。
今年の梅雨は雨が少なかった。まだ明けて
はいないが、暑いくらいの気温が続いていた。
夏服は嫌いだ。自分の身軀が出る。文香は骨
張った肘をさすった。
着いた時に空垂空はいなかった。川のすぐ
そばの、気に入りのベンチに座る。ここ周囲
りは丈の高い草に囲われていて、人目に着き
にくい。風が爽やかだった。

風と水と夏

きれい

歌ともいえない歌を、胸に湧く抑揚よくようにのせて歌う。人のことを考えなければ、きれいな歌が歌えた。人のことを考えると、醜みにく汚きたない歌になった。

「文香ふみかさん！」

歌い歇やめた瞬間、後ろから抱き付かれた。驚おどろきすぎて、恐らく一瞬は心臓がとまっただろう。ぜいぜいと息を荒あらげ振り返る。

「来てくれたんですね」

空そ垂あ空らがちよこんと隣となりに座る。呼吸が収まらないので前屈まえかがみで空そ垂あ空らを見上げる。「ごめんなさいそんなに驚おどろくとは」今更空そ垂あ空らが慌あわて出した。

一呼吸おいて、おち着つくと、二人は黙って座った。風が少し強いので、夫々それぞれ髪を押おさえる。水面みなもの光ひかりの反射を、二人で見守る。

「私」

空^そ亜^あ空^らが静かに言う。

「引越^{ひっこ}す時、小学校の友達と離れるのが嫌で嫌で泣き叫んでたんですよ。中学生になんかなりたくないって思っていました。でもこの町に来て、この川を見たら、そういうの全部消えちゃったんですよね。消えたというか、なくなっちはいないと思いますけど、凄^{すご}く好きになっちゃったんです。この川があっ^よて好^よかった」

きのうと違って穏やかに笑う空^そ亜^あ空^らは美^うく^うしかった。

十二

「文^ふ香^みさん、さっき歌ってたのとか、この前歌ってたの、誰の歌なんですか」

訊^きかれて文^ふ香^みは戸^と惑^まった。歌が誰のものかを考えたことがなかった。

「てきとう」

「適^あ当^あ？ え、誰かの歌じゃないんです

か？」

「ふみか文香はうなず頷突いた。

「へえ、ああ、そうかあ。え、そうなんですか？ ピアノとか習ってます？」

「ふみか文香は首を振った。

「え、夫それって凄すごいですよ。何なんで曲作れるんですか？ 何曲ぐらい今まで作ってますか」

「曲、は、作ってないよ。よく、わからないから」

「へえ、ああ、そうなんですか……」

「そ空あ空は要よう領りょうを得ていない様ようだったが、

ふみか文香も同じだった。二人でふしぎそうな顔をするので、二人で吹き出した。

「ふみか文香さん、先さつきの歌うた々うたって下さいよ。す

ごくいい歌でしたよ」

「ふみか文香はさみしく笑って首を振った。

「私、うまくないよ。歌、ほめられたことないし」

「そんなことないです。うまいっていうか、魂？ 魂が込められてるっていうんですか

ね。この川と一所いっしょですよ！私、文香ふみかさんの歌のこと好きになっただんです」

左右さう言われると何なんだかむず痒がゆいような気がした。川と一所いっしょにしてくれることを、すなおに嬉しいと感じた。息を吸って、しばらく呼吸をととのえた。

代かわりに、夕焼け小焼けを歌った。一分程、短かく歌った丈だけだったが、風が吹いていることを嬉しく思った。もうすぐ五時になる。どこかへ帰る歌を、さみしさと、少しの喜よろこびを込めて歌った。

この前よりは納得そとれができた。夫それでもまだ足りないなので、本当は、喜よろこびの、「また明日」を心待ちに待つ時の歌なんじゃないかと思っ

た。
空そ空あは小さく拍手しながら不満そうにもしていた。

「文香ふみかさんの歌が、聞きたかったんだけどなあ。じゃあもう一曲、聞かせてもらえませんか」

文香はさみしく首を振った。

「まあ、今日の所はよしとしましょう。すぐく素敵でしたよ。むり言ってますみません、ありがとうございます。又、ここで会いましょうね。ここで会うのが一番いいです」

空亜空もさみしく笑った。

「本当は、私、学校で会った時みたいな明るい子じゃないんです。小学校の時の友達が誰もいないから、無理して明るく、笑ってるんです。でも左右していると誰も本当の私のこと知ってくれなくて……文香さんといると、どうしてか分からないけど自然体でいれます。また、歌、きかせて下さいね」

少し離れたスピーカーが、夕焼け小焼けを流し始めた。

十三

男の子達が、上下に重なり、組み合う。砂埃が濛々と舞い立ち、太陽が凡てを照ら

し焼く。

声援というより怒号だった。男子は力になれよと声を囁かし、女子は奮い立たぬかと勇を操練る。体育祭の一番の見所でもある騎馬戦をしていた。最後は大将同士の一騎打ちになり、観衆は益自陣に勝利を引き寄せ可く声を絞った。

文香は声援の中で声を上げずじっと見ていた。筋肉が蠢めき相手の手を攫む。体勢を崩し一瞬の隙を見て鉢巻を奪わんとする。相手の馬が崩れた。大将は其一瞬で鉢巻を奪う。敵方は地面に強たか背を打った。大将は手を天に掀げ雄叫びを上げる。観衆は鐘の如打たれて応じる。割れんばかりの拍手が起きた。相手の大将は助け起され友人の肩につかまされた。一周回って英姿を誇った自陣の大将は馬から降り、互いに固い握手を交す。又大きな歓声が沸いた。勝者にも敗者にも等しく言葉が降る。力を尽した人らに人は優しい。

文香も手を叩いていたが、アナウンスが次

は徒競走と告げると発とした。出場するため一箇所いっかしよに集まる。周囲の興奮は未だ冷めておらず騒々ざわざわしていた。心臓の音が聞える。丸で周囲の騒めきざわに応ずるように心臓は落着おちつかなかった。

流れる音楽が変り、スタートの銃声に慄栗びくりとする。なぜ、走れ走れと急せかすような音楽を流すのかと思つた。次々と銃声が競争を促うながし、其度そのたびに文香ふみかは怯おびえる。呼吸を少し深くした。遠くで母が控えめに手を振っているのが見える。文香ふみかの呼吸はもう少し深くなる。

文香ふみかが走るのは最終組だったが、程なくして順番が来た。定位置に付く。「よい」の後の静寂が予想していたよりも深く、戸惑とまどう。銃声が鳴つた。驚おどろいてすぐ出たが、文香ふみか以外の走者は陸上部などの運動が得意な子許ばかりで、一瞬ごとに差が開く。文香ふみかは懸命けんめいに走つた。ゴールに向つて走っている筈はずなのに、背中を追わされている様に感じた。日差ひざしが頭を焼いて朦朧もうろうとする。

文香は躓つまずいて転かんだ。

十四

転んだ瞬間、前の人達がゴールしたようで歓声きこが聞えた。かなり先で、次々にゴールに達するのが見える。「すごい」「惜しい」「よやくやった」言葉が文香ふみかにまで届く。文香ふみかは慌あわてて立ち上あがり走った。頭が痺しびれている。急速に静かになっていくように感じた。音楽ばかりが間拔まぬけに何度もくり返されている。

文香ふみかは明らかに遅れていた。転んだ所せ為いばかりではなく、通常足の速い人を最後に配置するので、足の遅い文香ふみかとの差は歴然としていた。誰も何も声をかけなかった。学校全体が化物ばけもののように見えた。ただ、文香ふみかが漸ようやくゴールに近ちかづいた時にだけ、「あーあ」と誰かが独語つぶやいた。

ゴールに達すると終了を告げる銃声まが二度鳴った。文香ふみかは呼吸こが儘ままならず膝ひざに手を突い

た。「文香さん！」静かな中を誰かが飛び出した。空亜空だった。「血」蒼褪めた顔でつぶやく。見ると白い靴下を染めるほど膝から血が流れていた。体育教師の増田が馳けつけて「こりや出てるな」と怪我を見た。文香を負わって保健室へ向う。「血がつく」文香は切れ切れに増田に言ったが増田は「おう」と要領を得ない返事をした。

少しだけ騒ついていた観衆はアナウンスに最後のリレーを行う旨を告げられると平時に復した。距離のある保健室まで負ぶわれながら文香は音の変化を聞いた。空亜空は心配そうに跟いてきた。増田はぼそりと「最後までよく走った」と文香をほめた。

文香は増田の広い背中にもたれ、増田のジヤージを握って泣いた。空亜空は其背をさすろうとしたが増田の背が高く届かなかつた。代りに足にそつとふれた。文香は声をもらさず歯を噛んで泣いた。

保健室に着くと増田は戻り多恵が馳け込ん

できた。「みいちゃん」その其姿を見ると文香ふみかは多恵たえにすがって激しく泣いた。膝の痛みは感じなかった。只血ただが流れていた。一通り泣いて落ち着き、先生が処置あとをしてくれていた間に、指についた血の痕ぼうぜんを茫然と見つめた。

「文香ふみかちゃん、今日はよく頑張ったわね」

「……………」

「転んじやった時は、お母さんハラハラして倒れそうだったけど、ちゃんと一人で立ち上あがって、最後まで走ってとっても偉かった。文香ふみかはお母さんの自慢よ。終おわった後、走ってきてくれた子は新しいお友達？ 保健室に迎えに行った時*も*いてくれたけど。ソアラちゃん？ そう！ とてもかわいらしい子ね。名前も今時もって感じの名前だけど、そう、新しいお友達もできたのね。今度多恵たえちゃんと一所いっしょに連れてきなさいね。おいしいお菓子用意して待まってるから。そうか、文香ふみかちゃんに新しいお友達ができたのね。じゃあ今日はお祝

ね。文香ちゃんふみかの好きな料理用意するから、
楽しみにしててね」

文香ふみかは一人川むかへ向った。時間が経たつと、膝
の傷はずきずきと痛み出した。七月の夜はい
つも遅い。川へ叫んだ。

静寂が私を殺す

倒れる私を何度も刺す

血が流れているのが見えないの

血だけが赤く流れる

川の向うむかのビルにはひびさえ入らず、夜は
まだ来ない。

十五

部屋から居間に降りると、父がいた。父
は文香ふみかに気づくと新聞から顔を上げ、穏やか
に笑う。

「おはよう」

文香も「おはよう」と答えた。父が「文香は休みの日でも早起きで偉いな」とほめるので頷うなずく。父はハハハと笑った。

めずらしくポロシャツを着ていたので「ゴルフ」と訊きくと、「そうだよ」という。

「もう日ざしも強いってのに嫌になっちゃうよ。日射病で倒れちゃうなハハハ」

「暑い」

「梅雨つゆももうすぐ明あけるみたいだね。あ、文香ふみか夫それが此この前こ転んんだ傷かか、お母さんから聞いたよ。大きい絆創膏ばんそうこうだね。ちゃんと新しいのに変えてる？ こういうのは清潔せいせつさが大事だからね、面倒めんどうでもちよくちよく張はり替かえるんだよ。痛みはまだある？ そうか。よしお父さんがチュウして痛みを吸い取ってあげようか。何なにいらない？ そうか」

「あなた」

台所から母が顔を出す。

「そろそろじゃない」

「ああ、もうこんな時間か。じゃあ、行ってくるよ。夕飯は済ませてくるから。文香、あんまり相手してあげられなくてごめんね、うちみたいなの小さい会社だと昼も夜も休みの日もないよ。また、どっか遊園地にでも行こうな。じゃあ行つてきます」

「いつてらっしゃい」

母と二人で父を見送る。二人で顔を見合わせる。

「ご飯、できてるから食べましょうか」

母がそのままの顔で言う。

十六

教室の出入口から、空亜空の顔が覗くのが見えた。目が合うと空亜空の顔が輝やく。

「文香さん」

空亜空は文香の席まで来るとチョコンと蹲んだ。文香の隣にいる多恵にも「こんにちは」とにこやかに挨拶する。

「上級生の教室来るのって緊張しますね。
私、ここいても大丈夫ですかね」

「多分大丈夫だと思うけど……どうしたの」

「実はですね、私、今部活探してまして。

お二人の部活についてちよっとお聞きしたい
なあと。文香さん、何か部活されてます？」

文香は首を振る。多恵が補足する。

「一年の時に天文部入ってたけど、もうず
っと行っていないよね」

「多恵子さんは何かされてますか」

「あ、多恵でいいよ、みんなそう呼ぶし。

私は合唱部。私は、一応、まだ通ってます」

「合唱部ですか！ 合唱部ってどんな活動
するんですか、週に何回ぐらいやってます」

文香は二人が話すのを、空を見ながら聞いた。青い。余りにも晴れているので、少し雲
が欲しいとも思う。昼休みのため人も疎らで、
人声が囁かしい。

「じゃあ、合唱部見学に行ってもいいです
か。文香さんも行きませんか？」

突然言われて文香は驚ろく。目を丸くした。

「文香さんも、よかったら入りましようよ。」

うちの親戚しくて、ちゃんと部活もして勉強もしてきちんとした学生々活を送りなさいとか言うんです、きちんとしたってどういうことなのか教えてもくれないのに」

「空亜空ちゃんは、今まで部活入ってないの」

「バドミントン部なんですよ、籍だけは一応。最初に友達になった子が誘ってくれて入ったんですけど、私運動苦手なんでちょっときついなあと。夫でやめようと思うって親に言ったらいいけど他に何か入りなさいって。私ピアノも習ってるんですけど、ピアノ行つて塾行つてその上部活もびっちりやったらもうてんてこ舞いんです、くるくるなんです」

空亜空がおどけて目の回る様子を見せるので多恵は笑った。空亜空も微笑む。

「週に二、三回の活動だったら何とかかなりそう。じゃあ、放課後、よろしくお願いしま

すね。文香ふみかさんも一緒ですよ、約束ですよ。
ではまたお邪魔じやましますので」

空垂そあ空が手を振って去って行くので二人で
手を振った。多恵たえが笑っている。

「みいちゃん全然喋舌しゃべってないね」

言われて文香ふみかは左右そ言えばと思った。多恵たえ
は又また笑った。

「でもあの子、いい子だね。話してみて分
ったけど」

言われて文香ふみかは頷突うなずく。

十七

放課後、三人は並んで歩く。多恵たえが春江はるえ先
生はなに話しを通してくれたらしく、多恵たえは春江はるえ
先生はなについて話していた。

「私達は一年の時から春江はるえ先生が音楽の担
当なんだけど、すごくいい先生だよ。生徒の
目線で話してくれるっていうか、私も将来先
生になりたいんだけど、春江はるえ先生みたいな先

生になりたいなあって思ってるんだ」

「そうなんですか。大事なことですよね、生徒の目線で話してくれるって。私、小学生の時ですけど、もう明らかに『ガキは大人の言う事聞いてりやいいんだ』って態度の先生いてもう最悪でした。対等で話してくれないんですよね」

「ああ、小学校だったらそんなもんかもしれないね」

文香ふみかはふしぎだった。学校にいれば、いつでも、どこにいても、誰かの声ができる。生徒の叫ぶ声。歓声おたけの、雄叫びおたけの、声ができる。夫それがいつでも文香ふみかの神経を刺激する。

音楽室に着くと春江先生はるえが待っていた。「失礼します」と空亜そあ空あ空あが快活に挨拶する。

「はい、こんにちは。あなたが樋口ひぐちさん？」

「はい、樋口ひぐち空亜そあ空あといいます」

「今日は、見学でいいのよね？ まだ始まるまで時間あるから、ざっと説明するわね」

春江先生はるえは活動内容などを掻い摘つまんで説明

した。大抵は多恵の説明のくり返しだったが、空亜空は謹しんで聞いた。

「まあ実際に見てもらおうのが一番だと思うけど、ここままで何か質問ある？」

「あの、私、ピアノ習ってるんですが、伴奏の方つてもう決ってますよね」

「ええ、決ってることは決ってるけど、伴奏できるのね。ああ、そうか、今伴奏やってる子は渋々やってくれてるだけだから、もし、やってくれるなら助かるかも、その子に聞いてみないと分らないけどね。ピアノはどれぐらい？」

「三歳の時から習ってます」

「じゃあ大丈夫かな。ちよつと、聴かせてもらってもいい？ 今できる？」

「はい」

空亜空は淑やかに、臆する様子もなくピアノに向った。文香は空亜空をじつと見つめる。

「合唱だったら、合唱の曲弾いた方がいいですよ。一寸楽譜お借りします」

空^そ亜^あ空^らはパラパラと曲集を目^め繰^くり、無^む雑^{ぞう}作^さに曲を定める。春^{はる}江^え先生が横から曲集が閉じない様に押^おさ^さえる。空^そ亜^あ空^らは椅子^いの^すの高さや位^い地^ちを調整し、鍵^{けん}盤^{ばん}に其^{その}滑^{すべ}らかな指をのせる。

十八

弾^ひいたのは「待ちぼうけ」という曲だった。軽快な曲で、空^そ亜^あ空^らは滑^{なめ}らかに音を奏でる。文^ふ香^{みか}は踊り出したいような気もちになる。想像する。夕日の幻^{イメー}像^ジだ。夕日が射^さす音楽室。雑音は何も聞^きえない。ピアノの音だけがする。文^ふ香^{みか}は躁^{はし}然^やいだ。躁^{はし}然^やぐのに声は響かない。想像の中で人の声がしない。

空^そ亜^あ空^らは一番だけ弾^ひいてやめようとしたが、文^ふ香^{みか}が突如歌い出すので応じて弾^ひき続けた。想像から出ると、夕日も射^さしていない、遠くで、遠くで人の声が微^かか^すにしたが、文^ふ香^{みか}は目を披^{ひら}いて熱心に歌った。ピアノの音との一体感を感じた。文^ふ香^{みか}はやはり踊り出したか

ったが堪えた。其代りに歌った。腹の奥の動き出したい気もちで歌った。

終ると少し寂とした。夫から、春江先生が拍手する。

「樋口さん上手ね」

夫から多恵も寄って曲集をパラパラと目繰る。

「え、なんで、音符一つづつしか書いてないのに何で両手であんな風に弾けるの。普通ピアノの楽譜って音符がたてに何個も並んでない？ どうして」

「あ、それはこの上にアルファベットが書いてあるじゃないですか。これコードって言うって夫を見て適当に」

「え、意味が分らないすごい、空亜空ちゃんすごいんだね」

文香は呼吸を整のえていた。興奮が収まらない。幸福感が盈ちていた。目を閉じると、まだ夕暮の音楽室に居ることができた。

空亜空は艶のある目で文香を見たが、文香

の様子を見て先生へ目を戻した。

「うちにあるのアップライトピアノなんで、やっぱりグランドピアノだと全然違いますね。ピアノの先生の所で週に一回しか弾く機会ないから楽しい」

「合唱部入ったら空いてる時いつでもどうぞ。でも、これ位弾けたら樋口さんは問題なさそうね。そうか、そしたら文香ちゃん、文香ちゃんも合唱部入ってくれるの？ うん、有難うね、そうしたら前から言おうと思ってたんだけど、もうちよつと姿勢はこう。そう。下を見ないであごを引いて目線はまっすぐ前を見て。もっと口を大きく開けるの。ほっぺたをこうくいと、こんな風に上げてみて。一寸声に表情が乏しくて、安定感が足りないなあとは前から思ってたね、でも左右言うのは練習次第だから、大丈夫、これから、二人とも、よろしくね。二人も部員が増えて嬉しい」

春江先生の話しを真剣に聞いて、文香は

頷突うなずいた。

十九

「文香ふみかさんの魅力わかを分わかつてない！」

空亜そあ空あは憤然ふんぜんとした様子ようすで言った。文香ふみかも、多恵たえも、黙もくっている。学校がっこうからの帰り道かえりみち、三人さんにんは並ならんで歩あいた。

「私のわたしのピアノで、初めてはじめて文香ふみかさんが歌うってくれて、嬉うれしかったのになあ。くっそー声こゑに表情へいじょうがないだなんて。なんか悔くしい。文香ふみかさん、見返みかへしてやりましようね。そして又また私のピアノで歌うって下さい」

空亜そあ空あは熱烈ねつれつに文香ふみかの手てを握にぎった。文香ふみかは勢いきほいに圧おされて怯おそえながら頷突うなずく。多恵たえは不ふ服ふくそうだった。

「私も、みいちゃんが歌ううの好きすきだけどね、実際じっさいみいちゃんより上手たかな子は沢山たくさんいるし、もつと、何なんて言ういうのかな、高い声こゑとか出でせるようになった方がかたいいと思うおもうの。今の歌手うたかたな

んかみんな上手じゃない。音域おんいき広いのが普通だし。夫それには、ちゃんと春江先生はるえが注意してくれたこと受け容うれて、上手になるための練習をした方がいいと思うな」

多恵たえが言うので文香ふみかは真剣まけんに聞く。空垂そあ空らは何か言いたげだが口には出さなかった。少し険悪けんあくになりかけた所で別れ道わかれみちが来て、三人は穏やかに別れを告げ合った。

文香ふみかは家に帰ると、部屋のベッドに身を投げた。俯伏うつぶせになり真剣まけんに聞いた言葉を反想はんそうする。つまりあれは、どう歌うか、いかに上手に歌うかのための手段しゅんということだろうか？

文香ふみかが歌う時に考えている、感じているのはどこで歌うのかという一点についてだった。胸の奥おくに、歌いたいと叫ぶ場所があった。そこから歌うが生うまれる。厄介やくかいなことにその場所は移動する。移動するので仲々なかな捕まえられない。

真しんに其場所そので歌うことができたことは一度もなかった。今日は、かなり近かったが、矢張やはり少しずれている。文香ふみかは自分が本当に歌いかけた。だから歌を歌った。

言われた歌い方を覚えれば、其場所そので歌うことができるだろうか。どこで歌うのかと、どう歌うのかは、全またく懸かけ離はなれている気もしたが、分わからなかった。文香ふみかは疑問を自分の言葉にすることができない儘まま、考えていたら、いつか眠っていた。

二十

合唱部の練習は、まず体操から始まり、発声練習をし、パートごとの練習を経て全体での練習に移る。体操は腹筋や、背筋、毎回ではないが走ることもあったので、体力のない文香ふみかには少し負き荷つかった。

多た恵えと文香ふみかはアルトというパートになり、空そ亜あ空らは希望通り伴奏をすることになった。

自己紹介をする時も空亜空は明るく振る舞い、文香は訥々と喋舌り、二人は夫々に相應の拍手を受けた。

文香は一人の女の子に話し懸けられた。

「関根さん久しぶりー私、一年の時に一緒だった渡辺なんだけど、覚えてる？」

言われて文香は頷突いた。確かに見覚えがあった。文香が頷突くのみで喋舌らないので、渡辺さんは「よろしくね」と丈挨拶して去った。

多恵はなぜそこで会話を繋がないのかとハラハラしながら見ていたが、余り口を出すのも文香のためにならないと黙っていた。合唱部は全員で十人余りいたが、男子は三人だけなので略女の子だった。

其三人の男子は全員二年生だった。合唱部に這入る男子は是でも多い方かもと多恵は春江先生から聞いたことがあった。此中の工藤という男子が多恵は苦手だった。

工藤は自分の話ししかなかった。

「ブログを書いている奴は多いみたいだけ
どな、其ほとんどのものに価値はないんだ。
なぜかわかるか。大抵はつまらない日常の垂
れ流しじゃないか。まあ、俺のブログを見て
もらえれば違いが分ると思うけどな」

口調は大袈裟で、嫌味たらしく、同じこと
をあちこちへ行つて吹聴した。言われて多恵
は見てみたが、話と同じ調子の文が平坦に
並んでいるだけで、寧ろ他の子より詰らなか
った。絶望と希望という言葉が矢鱈と使われ
ていた。工藤は外見も野暮ったく、女子から
も、他の二人の男子からも少しの距離を置か
れていた。

工藤は空亜空に話しかけた。

「ふーん、ソアラちゃんっていうのか。い
い名前だねえ。まあ分らないことあった何で
も俺に訊きに来てよ」

大きい声で笑う工藤に、空亜空は莞然とし
て簡単なお礼を一言述べた。

また別の日、空亜空は工藤に話し懸けられた。

「ねえねえ、空亜空ちゃんは彼氏いるの？
って言っても、一年だから彼氏はまだ早い
か。好きな人いるの？」

空亜空はにっこりと笑った。

「はい、彼氏います」

工藤は呆けた様に「あっそうなんだ」と言
って引き退った。其日の帰り道、三人で帰っ
ていると多恵は言った。

「空亜空ちゃん、今日、彼氏いるって言っ
てたけど、ほんとにいるの？ 夫とも嘘つい
た丈？」

「あ、いることは、います。でも、形丈
って感じですよ。同じクラスの人ですけど、何
か子供っぽくて」

「あ、ほんとにいるんだ……空亜空ちゃん、
かわいいもんね。やっぱりかわいい子は違う

んだね」

「かわいくなんか」思いの外強ほかい語調で空そ亜あ空らは反応した「外見そなんて、どうでもよくないですか。中身を、好きになってくれるから、嬉しいんですよ。形丈かたちだけ彼氏かいたって何にもならないです」

「でも、形丈かたちだけでも彼氏かいる子こなんて其そんなにいないよ。私も左右そだし。うらやましいなあとは、思うけど」

別れ道で、立ち止たつて話じましている時だったので、もう少し話してみな帰った。文香ふみかは空を見ていた。青空あに浮うぶ雲かが、今日は殊更ことさらに美うくしく見えた。気分が突然こ昂揚うして来て、腕を広げて、回りながら歩いた。歌う。石いに躓つずいてバランスを崩し、尻しもちをついた。見上げると空は空の儘ままだった。嬉しくて声を上げて笑った。

「文香ふみかさん、大丈夫ですか」

声こゑに振り返ると空そ亜あ空らがいた。文香ふみかは笑顔で頷うなずいた。

空^そ亜^あ空^らは文^ふ香^{みか}と話^{はな}しがしたくて戻^{かえ}ってきたと言^いった。空^そ亜^あ空^らは沈^{しず}んだ表情^{へいじょう}で

「文^ふ香^{みか}さん、もしよかつたら川^{がわ}に行^いきませんか」

と言^いった。

暑^{あつ}かったので、風^{かぜ}が爽^{さわ}やかで気^きもちよかつた。二人^{ふたり}はベンチ^{ベンチ}に座^まり川^{がわ}を見^みる。若^{わか}い男^{おとこ}の子^こが何^{なん}人^{びと}か集^あまってキヤツチボ^{キヤツチボ}ール^{ール}をしているので、い^いつもより騒^{さわ}がしい。文^ふ香^{みか}は川^{がわ}と空^そを見て、空^そ亜^あ空^らは地^ち面^{めん}を見^みていた。

空^そ亜^あ空^らは暫^{しば}らく喋^{しゃべ}舌^{しやべ}らなかつた。文^ふ香^{みか}は珍^{めづ}しくい^い気^き分^{ぶん}が續^つくので、又^{また}歌^{うた}った。胸^{むね}の奥^{おく}の少^{すく}し右^{みぎ}。完^{かん}全^{ぜん}にこ^ここではな^ないとい^いうもどかし^しさも少^{すく}しあ^ある。

文^ふ香^{みか}の歌^{うた}が歇^やむと、空^そ亜^あ空^らが顔^{かほ}を上^あげた。

「文^ふ香^{みか}さん、私^{わたし}つてか^かわい^いい^いです^か」

文^ふ香^{みか}は首^{くび}を傾^{かし}げた。

「こんなこと言うの、生意気だって思われるって分わかってます。でも、私、外見で評価されたくないんです。色いろんな人がかわいいうって言うてくれますけど、じゃあ私がかわいくなかったら何の価値もないのって、同じように見てくれないのって、いつも心で叫こゝろんでます。私、変かわってるんです。だから生きい悪にくいんです」

空そ亜あ空らは又また視線を下げた。ベンチの厚みを掴つかんで、震ふるえている様ようにも見える。

文ふ香みかは指先で空そ亜あ空らの頬ほを撫なでた。

「きれいだよ」

文ふ香みかは笑わらう。

「川かみたい」

空そ亜あ空らははっと目を瞠みいて、折れそうな文ふ香みかの腰こしに抱だき着ついた。

「私、芸能人の誰たれに似にてるとか、そういうの言いわれるのすごい嫌きらで、でも面おもてとむかって嫌きらっていけない自分おれも嫌きらで、夫それに愛想あいさつ笑わらいして『そんなことないです』って言うてる自分おれもすごい嫌きらで、でも、何なにで嫌きらだったのか今いま分わか

りました。私、川の水面に映る光とか、そう言う『本当にきれいなもの』になりたかったんです。私のこと、本当に分わかつてくれるの文香ふみかさんだけです。『本当の私』は、いつもここにあるのに、ほかには誰も見てくれない」

ぎゅっと抱だき着ついて離れないので、文香ふみかは空そ匣あ空らの髪を撫なでた。

歌を歌った。

大丈夫 大丈夫 大丈夫

鳥が一羽飛んで来て、川の面おもてを泳いだ。

川の美うくしつさは増ました。

二十三

工藤くどうは空そ匣あ空らに恋人がいることが分わかつてから話しかけなくなった。其代そのかわりなのか、何なんなのか、文香ふみかに話しかけることが増えた。

「お前が縷り々がだな。ちゃんと喰たべてるのか」

「あー関根君。歌っていうのは左右いうんじゃないんだな。もっと魂を込めないと。君の歌には魂が籠ってない」

文香が彼の話しを聞いて、真剣に頷突くので、気を良くしたようだった。其後で多恵は言った。

「みいちちゃん。あの人の話しは適当でいいんだよ、自分だって旨くないのに偉そうに言ってるだけなんだから。他の部員は誰も真面に相手しないよ、だからみいちちゃんの所行くんだらうけど」

多恵の忠告にも文香は真剣に頷突いた。

文香は誰の話しても真剣に聞いた。真剣に聞いて、頷突き、自分の中に取り込もうとする。後で手に取って、嚼み砕いて、吸収しようとする。夫が最近は、できないことが増えた。相手が何を言っているのか分らない、分っても、なぜ左様なことを言うのか理解できない。魂、魂とはなんなのだろう、歌が旨い、下手、夫が何だと言うのだろう。文香は家の

ベッドで、天井を見て考えることが多くなつた。

春江先生は文香によく指導した。

「文香ちゃん、テンポ遅れてる」

「この場面ではお腹からわあつと声を出して」

文香は随って行こうと必死に修正した。然し、頑張っている積りでも、春江先生には足りないらしく同じ所で何度も注意を受けた。

多恵は

「みいちゃんに期待してるから厳しく言うんだよ」

と励ましてくれたが、文香は少し消耗した。

自分が、全体の中の一部になっていくような気がした。春江先生が目指している一つの「完成されたもの」があつて、其所に各が嵌め込まれていくように思えた。大袈裟に言えば、自分自身である歌を、奪われていくようにも感じられた。

合唱部員の人達は、練習が中断するきっかけになる文香ふみかに多少苛いらだ立つこともある様だったが、露骨な疎外はされなかった。文香ふみかは又また歌ったが、川と、夕暮れとを、恋しく思うことが増えた。

二十四

ある日、工藤くどうから言われた。

「お前はしょうがねえなあ。じゃあ俺が、練習に付き合って指導してやるよ。な？　これ以上先生に注意されたくないだろ？」

文香ふみかは先生から注意されたくないとは思わなかったが、工藤くどうが強引に「じゃあカラオケで練習な、夫それが一番捗はかど取るから。明日、十二時、遅れるなよ。ほら携帯貸せ。番号交換してやるから。遅れたら何回でも電話するからな」と話しを進めるので、文香ふみかは怯えながら頷うなずいた。

工藤くどうはなぜか二つ隣となりの駅を待ち合あわせに指

定して来た。理由を訊いてもいないのに「お前と遊んでるの見られたら恥しいからな」と言う。文香にはその意味がよく分らなかつたが、何か醜くさを見た様な気がして顔を顰めた。

当日、ちようどお昼に文香が駅に着くと、工藤はいなかった。すでに夏休みに這入つていて、今日は練習がない。暑かった。快晴で遮るものもなく日差が地上に降る。文香は気にいりの花柄のワンピースを着ていた。少しふくらんだ袖が可愛いらしい。文香は汗をかいた。流れる汗と、汗をかくような暑さのことを、美しくしいと思つた。

工藤は五分程遅れてきた。「電車が目の前で رفتちやつてさ」と詫びもせず言うので、文香は頷突く。工藤はえーと言いながら、駅前をキョロキョロと見回した。おれの記憶では、駅前にあつたと思ふだけだ。記憶の確かさを主張する。見渡した限りでカラオケが見つからないので、ひとまず歩き始めた。

会話はなない。工藤はあっち、あるかもとひとり語ちずんずんと歩く。工藤は文香より稍小さく、歩幅は変らなかつたが、ペースが早いので跟いて行くのに苦勞した。五分余り暗雲に歩き回つて漸やく一軒見つかつたが、満員だつた。おかしいな、なんだよ。工藤の口から何度も言葉が洩れたが、自分に向けたものには感じられなかつたので文香は反応しなかつた。

其附近にもう一軒が見つかり、其所は空いていた。工藤は

「な、あつただろ」

と初めて文香のことを見て言つた。

二十五

部屋に這入ると、随分狭かつた。略一人用のソファがL字型に二個配置してある。ソファは所々破れている。余り明るくないせい
か、壁紙が薄汚れて見える。部屋のドアが閉じた瞬間、文香は閉じ込められた気もちがし

た。

又またドアが閉まると、そとの音が小さくなり静けさが増した。ガラガラ声の男の人の歌がいくつもの壁や扉を通して聞える。工藤は「暑あつちいな」と言いながら食事のメニューでタパタと扇あおぐ。

文香ふみかは何をしていいかわわからなかつたのでじつと座まっていた。工藤くどうは落着おちつかない様子ようすできよろきよろした後、リモコンを手てに取とった。二人が喋しゃべ舌しやべらない間も周囲の歌は届とく。蝉せみの声も、夏の暑さも届とかない部屋で文香ふみかは控くえている。目の前の機械きかいが曲きょくを流ながし出した。

「よし、おれが手本てほんを見せてやるから」

工藤くどうはマイクを手てに取り歌うたい始めた。曲きょくが進すすむにつれ、画面の文字は色を変かえながら移うつり変かわっていく。画面の文字は愛あいを礼賛らいさんしていた。汚きたなくて、美うくしい世界せかいのことを、変からない無償むしょうの愛あいのことをほめていた。工藤くどうは元もとから高たかめの声こゑをしていたが、歌うたう時はもつと高たかかつた。工藤くどうは一曲いっしやく歌うたい終しまえた。

「なんだ、九十点か。もうちょつと行くと
思っただけだな、最初だからこんなもんか。俺
の最高は九十八点だからそろそろ百点行くと
思うんだよな。この採点機能を使えば音程と
カリズムが合ってるか判定してくれるから、
練習になるぞ。ほら、お前もなんか入れれば」

画面では九十点という数字がでかどかど
っていた。夫それが消えると、タレントらしい女
の子が写って宣伝を始める。工藤くどうは又またリモコ
ンを手に取り、曲を入力していた。入れ終え
ると文香ふみかの前にリモコンを置き、歌い始める。
文香ふみかはリモコンを手に取った。

文香ふみかは少し前に多恵たえと来た時に多恵たえが歌っ
ていた曲を思い出す。たしか君を永遠に守る
か離れても一緒そだよか左ひだりんなようなことを歌
っていた。具體的ぐたいてきにどうすれば永遠とこに守れる
のか、離れても一緒にいられるのか其点そのに就
いては触ふれられていないので分わからなかつた
が、メロディーを思い出すと思おもい出せた。記
憶の中の音の上あがり下さがりを頼りに文香ふみかは曲を入

力した。

工藤くどうの歌に九十二点という点をつけ、機械は次の曲を流し始めた。文香ふみかは歌ったが、手に持つマイクを邪魔だなど思った。流れてくる音楽を、余計に思った。目を閉じてても、暗く狭い部屋にいた。

二十六

工藤くどうは文香ふみかが歌っている間、聴きき入いっているようにも見えたが、機械が七十二点という点をつけると大声で笑った。

「お前、何だよこの点数、俺がこの前まへふざけて歌った時でも七十六点だったぞ。抑揚よくようもないし、リズムもだめだってよ。後声あと量りょうだよなあ声こゝろ小ちつちええんだよだから点数出ないんだよ。やべえ面白おもしろえ写メ撮とつとこ。この機械こんな点数出せるんだあ」

文香ふみかはマイクを握にぎった儘まま茫ぼうつとしていた。歌っている時も、歌おい終わった後のちも、昂揚こうようや、

悲しみ、怒り、喜よろこび何も感じなかった。どこで歌うのか、どう歌うのか、其その違いさえ感じなかった。只ただ歌う場所が違ちがうという丈だけで、自由を奪さらわれた様に感じた。

呆ほうけた文ふみか香かを落おちこ込んだものと見たらしく、工藤くどうは言った。

「まあそう落ち込むなよ、ここにいいお手本ほんがいるんだからさ。今日は存ぞん分に聴きいて盗ぬすんでいいぞ」

嬉き々きとして流れた曲を歌い出す。目の前の工藤くどうの声も、どこかの部屋から漏もれ聞きえる声も、文ふみか香かには関係のない遠くの雑音ざつおんに聞きえた。今回九十六点を叩き出した工藤くどうは「今日はこんなものかなと」嬉きしそうに言って、携帯電話けいとうでんわ話を画面に向けた。

写真を撮とられた数字が踊る、跳はねる、輝かがやく。
く。

其翌日、合唱部の練習に出た文香は、別の息苦しさを感じた。自分はどこにいても自由に歌えないのかと思う。其息苦しさが歌に出たのか、春江先生に三度注意を受ける。

練習が終つたら、逃げるようにして川へ向つた。お気に入りへのベンチに座る。歌おうとしたが、歌が出なかった。戸惑つたが蝉の声に気づいて、耳を澄ます。風が吹いて葉がお互いを鳴らし合う。暫らく其儘でいた。

日差が強くて、余りじつとしてはいられない。背の高い草が蔭を作っている所があり、逃げ込んだ。直下に草の上に座り、草の匂いを嗅ぐ。気もちが少しずつ落ち着いた。慎重に、歌ってみる。歌詞もないただ口遊む丈の歌が、穏やかにこぼれる。

歌えたことに安心して、二時間ほどじつとしていた。日が少し傾むいてベンチに蔭ができたのを確認して、ベンチに戻る。歌った。

くさがりが嫌い

苦しいから

でもどこにでも でもどこにでも

蔭かげが濃かくなった。

振り返ると、空そ匣あ空らが立たっていた。

「文香ふみかさん」

悲しいような怒ったようなやり切れない顔をする。

「工藤くどうさんとつき合あってるんですか」

文香ふみかは首くびを傾かしげた。其後そので、首くびを振ふる。

「すきじゃないよ」

「やっぱり！ そうですよね、あの人練習の後で女子に言いい触ふらしてましたよ、文香ふみかさんと一緒にカラオケ行って、あいつは七十点でおれは九十六点だとかなんとか。私の友達にもいますけど、カラオケで得点をやたら気にするのに碌ろくなのいませんよ。あんなの正確に音程出して歌えれば点数出るんだから、あんな機械で文香ふみかさんの点数は計れませんか。百二十点です、私に言いわせたなら文香ふみかさんは。そ

んで工藤は三十点」

熱烈に喋舌り出す空亜空に文香は悲しい気もちで笑った。点数のことが嫌いだと言えなかった。汗が目に入り、ぎゅっと目をつぶった。

二十八

文香が断われないせいにか、工藤が段々と図に乗ってきた。

「おい、お前」

最近の名前さえ呼ばない。他の部員にまぎれて帰ろうとする文香を、呼びとめる。

掴まると、蜿蜒自分の話しをする。もう殆んど聞いていないが、自分の歌が旨いこと、自分が日頃感じた鋭どい考察、遠くで上級生の先輩が「かっこいい」とほめるのが聞えたことなどを、遠回しに言うので又時間がかかる。同じ話しも多い。「真剣に聞くからだ」と多恵は言ったが、実際は聞いてさえくれ

ば誰でも構わないという態度だ。

夏休みなので教室は誰もいない。音楽室は居心地が悪いらしく、態々教室へ移動したがる。遠くでは運動部の子達の声と、蟬の声とが混じり合う。文香は其方に気を取られていたが、工藤が上げた「しようがねえなあ」という一際大きな声に驚ろかされた。

「お前はほんとしようがねえなあ。しようがねえから、おれがお前とつき合ってやるよ」
文香には其意味がわからなかった。

「お前みたいな彼女、ほんと嫌なんだけどな。お前も彼氏欲しいだろ？ 仕方ないから、おれが」

文香は咄嗟に頭を振った。

「いや」

大きな声を出した。

「いや」

工藤は少し呆然とした。其後で更に大きい声で怒鳴った。

「お前に、断わる権利なんてねえんだよ。」

勘違い、してんじゃねえよ嫌なのはおれだよ、調子乗って断ことわってんじゃねえよふざけんな」

其その声の逆上の響きに怯えていると、一声「ふざけんな」と重ね工藤くどうは教室を出て行った。ドアを壊れんばかりの勢いでこじ開けるので、其その反動で扉が跳はね返り危かえうく外そとに出る。足音も故意わざと立てているのだろう音を立てて遠ざかっていく。文香ふみかは怖くて心臓の音を聞いていた。音を聞いてやって来た体育教師の増田ますだが

「なんだ、どうした」

と訊きくので、文香ふみかは訳わけも分わからず走って逃げた。

二十九

多た恵えの家に行く。家の呼よび鈴りんを鳴らすと、多た恵えの姉が出た。

「お、みいちゃん久しぶり」

軽やかに声をかけてドアを開けてくれるが、文香はおどおどと会釈した。

多恵の部屋に這入り、急いで多恵に話した。

「だからはつきり断わらないとだめだよって言ったのに」

どもりながら、懸命に話したら、多恵が呆れた様に言うので又心臓が跳ねた。孤独が急に襲って来る。元々汗ばんでいたのか、今大量に流れ出したのか、分らなくなる。頭が茫とする程熱かった。

多恵は二、三の質問を重ね、最後は笑った。

「みいちゃんはしょうがないな。みいちゃんが最後に頼れるのは私しかないんだから、私が守ってあげるよ。まあ、そんな恥かいて又何か言ってくるとも思えないけど、一緒にいて上げる。でもあいつ最低だね。みいちゃんが断われないと思って言って来たんだよきつと」

多恵は寧ろ上機嫌になって喋舌った。文香は、今言われた「しょうがない」という言葉

を考えた。私は其んなにしようがないのだから。何が、どうして、しようがないのだろう。心臓の鼓動は、少し落ちついたけれど、夫でも不安な音で何度も文香の胸を小突いた。

三十

合唱部の練習は、夏休みの間、週に三回朝からお昼を挟んで六時間ほど練習する。夏休みが明けた九月に、県の合唱コンクールがあるため夫に向けて仕上げて行く。次の練習があったのは工藤に怒鳴られた翌々日のことだったが、工藤も文香も休まず練習に出た。

多恵は宣言通り文香の傍に居てくれた。守るといふより、さり気なく工藤が目に入らないよう間に立ってくれるという程度のことだったが、文香には有難かった。文香は工藤を見ることができなかつたし見たくなかつた。怖かった。又怒鳴られる様な気がして身を竦めた。

文香ふみかの様子に気づいた空亜空そあからがお昼を食べながら声をかけた。

「文香ふみかさん、大丈夫ですか？ 体調悪いんじゃないですか？」

多恵たえはなぜか得意とくい気に笑んで「夫それがね」と話し始めた。余あまり他ひとに知られたくない文香ふみかは益ますます身を縮ちぢめた。

多恵たえは

「だから私が守って上げてるの」と寧ろむし弾はずんだ声で話はなしを締しめた。

箸はしを啣くわえながら話はなしを聞いていた空亜空そあからは、膝ひざに置いていた弁当べんとうを脇わきに置くとすつと立ち上がった。

目の色が冷たい。

三十一

空亜空そあからは音もなく歩き始めた。多恵たえがふしぎそうな顔で夫それを眺める。文香ふみかは目の光に圧おされて声が出なかった。

合唱部員は、大抵音楽室の周りで仲の好い者同士寄り集まって昼を食べる。工藤は床に座り、一人で弁当を食べ終えた所のようである。近く空亜空を見上げるとへらへらと笑った。

「空亜空ちゃんどうしたの」

言い終った直後のタイミングで、空亜空は長い手足を鞭のようにしならせて工藤の頬を張った。乾いた音が音楽室に響く。

「ふざけないでよ。誰と誰が付き合うって？ あんた鏡見て左んなことが言える訳？ 優しい文香さんがあんたに合わせて上げてることが分らない位の馬鹿な訳？ あんた他のことちゃん付けで呼ぶことが免されるレベルまで達してないでしょうが鏡見て自分を見詰めて直しなさいよ馬鹿なの？ 何を基準にしたら其所迄自惚れられるの？ 彼女作りたいとか盛る前にやるべきことが山程あるでしょうが」

途中から文香が獅噛みついて抑えたが空亜空の口は止らなかつた。工藤は言葉にな

らない狼狽を口から洩らし頬を抑えて罵倒される。遅れて多恵が「空亜空ちゃんおちついて！ おちついて」と声をかけるが身體を抑えることには躊躇して後ろや横に移動して口を出すのみだ。音楽室は騒然となった。

春江先生が職員室から出て「どうしたのと場を収めようとするが空亜空の怒りが熄まず、自分で言っていて興奮したのかももう一度工藤を叩こうとする。工藤は半分泣いていて夫に怯えた。文香は全身で空亜空に抱きつきながら知られたくなかったのにと泣きたくなってきた。部員の数名で空亜空を抑えて楽になった文香は又逃げ出した。頭に何か甲高い音が響いて上手く考えることができなかつた。

三十二

夫からの経過は、家に詫まりに来た空亜空と多恵に聞いて知った。文香が逃げて我に返

った空亜空が状況を説明し、詳細を話すことは避けたそうだがとに角文香と工藤の間にもめ事があつた事は部員に知れた。空亜空が「本当にごめんなさい」と深々と頭を下げた。

「私、嚇となつちやうと時々ああなることがあつて、見境なく突つ走つちやうんです。

もう本当になんとお詫びしてよいか」

「いや、みんな、呆気に取られてたよね。

でもこれで空亜空ちゃんに逆らう合唱部員はいないね」

多恵は場を和ませる積りで冗談を言つたらしかつたが、誰も笑えず場は寧ろ重くなった。

工藤は「もう部をやめる」と喚き出したと言う。

「やめりやいいんですよ、あんな奴」

空亜空は反省しながら工藤に対しては毒吐いた。

多恵は「とに角文香ちゃんからも話しを聞きたいから、もし平気なようだったら次の練習の日、早めに職員室に来て」という春江先

生からの伝言を伝えた。

帰る間際、空亜空はもう一度頭を下げた。

「本当にすいませんでした」

空亜空の小さい顔が下がって上がるのを見届け、文香は一生懸命笑った。

「ありがとう」

空亜空は驚ろいた様に目を瞠き、潤ませると、あべこべに文香を抱きしめて

「ごめんなさい」

ともう一度つぶやいた。

手を振る二人が、少しずつ夕暮れに溶けていく。

三十三

ノックをしようとする、訳もなく動悸がした。自分が何かをした訳じゃないと、言い聞かせて職員室の引き戸を叩く。「はい」という声がした。

「失礼します」

文香は職員室に入った。多恵が「跟いて行こうか」と言ってくれたが、一人で行くことにした。春江先生は何か作業していた手を止め、顔を上げた。

「早くに来てもらってごめんね」

目が疲れたのか、一旦めがねを外して目の間をもむ。文香は目の前の椅子に座るよう促がされて、腰を卸す。春江先生がめがねをかけ直す。

「この前の話なんだけど」

文香は春江先生が話すのを神妙に聞いた。

「空亜空ちゃん、工藤君から、何となく聞いたわ。まあ、こういうのは大抵喧嘩両成敗というか、なんて言うのかな、文香ちゃんもちよつと意識しすぎちゃったのよね？ まあみんなお年頃だもんね、それ自体は仕方ないことなんだけど……んー夫でね、まあ解決策の話しなただけど、文香ちゃんは彼に詫める気があるのかな？」

文香には春江先生が何を言っているのか丸

で分らなかつた。

「わた、しが、ですか」

虚ろに問い掛け直すので精一杯だった。

「うん、勿論彼にも詫まってもらうけどね、

ほらこういうのはしようがないじゃない、

左右やって落とし所って言うのかな？ 見つ

けないとね」

「いやです」

春江先生が何を言いたいのか、言っている

のか、分らないので判然していることだけ口

にする。

「いや」

春江先生は困ったように腕組みする。

「うーんでもねー彼も一寸冗談で『彼氏い

る？』って訊いた文でしょ？ 夫で『いや』

って騒ぎ出すのは一寸過剰な反応じゃないの

かなあと先生は思うのね。元々、二人仲好く

てお互い話し懸けたりしてた訳でしょ？ 年

齢も年齢だから、夫くらの質問当り前だと

思うのね、まあ彼も唐突すぎたかもしれない

けど」

文香は突然頭を殴られたようにくらくらした。春江先生の言葉が、益頭に這入らなくなる。

三十四

「それ、は、あの人が言ってたんですか」
言う文香に春江先生は頷突いた。

「そう、工藤君ね、夫でね、工藤君、部活退めるって言い出してるのよ。私としては、貴重な男子部員だし、コンクールも近いし、こんな事で和を乱したくないのね。だから、二人が、仲直りしてくれば夫が一番みんなに取って好いことだと思っただけど、どう？仲直りできる？」

春江先生は文香の顔を覗き込もうとした。文香は俯向いて痛い程拳を握っていた。

「いやです」

唯一浮んだ言葉を、息の根を止めるように

絞り出す。

「そっかー困ったなー、実は工藤君もね、
文香ちゃんから詫まって来たら自分も詫まる
って言ってる、お互い意地になっちゃってる
丈じやないのかな。どうせいつか仲直りする
なら、今してしまった方がいいようにも思う
けど、どう？ 仲直りできない？」

文香が痺れた頭で考えたのは、先生が場を
収めることしか考えていないだろうことだっ
た。「いつか」も「仲直り」も、意味が分ら
ない、理解できない、ただ、嫌悪の念丈がど
す黝く膨れ上っていく。「やめます」辛うじ
て言った。

「私がやめます」

春江先生は寧ろ明るかった。

「そっかー残念だなあせっかく這入ってく
れたのに。でも、二人は同じ学年だから、私
から工藤君にも能く言っておくからね、もし、
次いつか話す機会があったら今度のことは忘
れなきやだめよ。怒りは何も生まないんだか

ら。文香ちゃん、歌うのが好きなんだから、もし心の整理がいたらいつ戻って来てくれないからね。其時は私も協力するから。じゃあ、ごめんね、朝からわざわざ来てくれてありがとう」

文香は握った拳が離れない儘立ち上って、頭を下げた。「ありがとうございました」言った後で、思い出した様に春江先生が言う。

「左う言えば、私、文香ちゃんには厳しく当たってたように感じちゃったかもしれないけど、あれは文香ちゃんに見込みがあったからよ。文香ちゃん、歌うの好きな気もち、忘れないでね。夫が一番大事なんだから」

春江先生は握り拳を軽く振って文香を応援してくれた。文香は聞いた事があった。他の部員が先生に

「先生、なんで関根さんに厳しいんですかと訊いたことがあったのを。」

「あの子、声が浮いてるのよね。何度言っても直らないの」

文香は呻いたが、身體を折り曲げて声を押し隠した。深々としたお辞儀は、醜みにいもの見えなくさせて、又元またに戻る。

三十五

「あああああ」

文香は布団ふとんを頭まで被り、思い切り叫んだ。憎しみを、怒りを、喉のどから追い出そうとする。破れよと許ばかりに布団ふとんに爪を立てた。枕元まくらもとにある目覚し時計を、壁に叩き付けようとして、違ちがうと直前おもで思い留とどまる。ものに当あたって、凡すべてが壊れても、憎しみが出て行く訳じゃない。思ったが堰せかれた憎しみは愈募しよいよつった。

憎しみが頭で暴れ回る。何が、憎いのかさえ、分らない。

室の扉が、ガチャリと披ひらいた。母だった。

「文香……？」

怯えた様に声をかける。

「どうしたの」

母は恐る恐る近付いて文香のベッドに腰を掛けた。文香は布団に隠れて獣のようだ。

「お母さん」

文香は母に縋り付いた。

「正しいって、何。きれいなものは、どこにあるの。嘘を言えば、夫は、ばれなければ本当なの。誰が正しいの。何が正しいの。怒りって何。何も生まないの、怒っちゃいけないの？ 正しいものはどこにあるの。嘘って何。正しいものって、見ただけじゃ、わからないの。どうしてわかるようにできていないの」

母は笑いもせず悲しそうな顔をした。母にこんな顔をさせているのは自分なのだと思うと、頭がぎゅっと締まった。母は文香のことを抱き締めた。

「文香、悩んでるのね。大丈夫、その答えはいつかきくと見つかるから。焦らず探すのよ。大丈夫、大丈夫よ」

母の胸で文香は呻いた。違う！ 違う、其

んな答えが欲しいんじゃない、いつかじゃ足りない、どうして大人は「いつか」の話しをする？ 足りない、足りない、正しさのことを、美しくしさのことを、知りたい。

此世界のどこに美しいものがある？

美しいのは、自然の、世界のことだ、人間のことじゃない。人間は醜くい憎い一つも正しくない。世界の、代りに、人間は到底なれない。

夫でも文香は母に縋って泣いた。母は、辛抱強く文香の背中をさすった。

最後にはさする音と、寝息だけが残る。

三十六

文香が合唱部を退めて数日経ったある夜、多恵と空亜空が連れ立ってやって来た。

二人はニコニコしている。

「夏祭り行かない？」

文香は忘れていたが、言われて近所の公園

で夏祭りがあることを思い出した。

私服に着替えて出ると、空垂空はここに来て初めての夏祭りだと躁然いだ。多恵も、私達は毎年来てるよねと一緒に躁然ぐ。文香は真剣に聞いてうんうんと頷突く。誰も合唱部の話しは出さない。

遠くからでも、太鼓の振動を感じた。盆踊りの音楽も聞える。幾何も釣られた提灯を見て、文香は毎年抱く昂揚を思い出す。音楽や、食べ物、祭り全體の雰囲気への昂揚を、丹念に掘り起そうとする。

もう暗くなり始めていた。公園に着くと、櫓、櫓から縦横に延びる提灯、立ち並ぶ出店の明りで眩しい程だった。人は其所中に溢れている。大人、こども、男、女、問わず浴衣だったり、洋服だったり、多くの種類の人がいる。大声で客を呼ぶ出店の人、其前で騒ぐ若者達、音楽に合せ踊るおじさん、おばさん、其間を縫うように馳け回るこども達。

其どれもが醜く見えた。文香は戸惑った。

自分も興奮した、其一部だった人いきれ、声、人工的な提灯ちようちんの明りあか、凡てすべ、去年とは別のものが用意されたようだった。

「みいちゃん」

文香ふみかを呼んで多恵たえが笑う。多恵たえの笑顔は変わらない。自分だけなのかと思った。多恵たえは此違和感を感じていないのかと思った。

「文香さん」

空そ空空あは射的しやてきの銃をもって文香ふみかに笑い掛け、器用にぬいぐるみを取って嬉しそうに声を上げる。

文香ふみかは深呼吸をした。口の中で、歌う。大丈夫。自分に言いきかせた。寧ろ目むしを披ひらいてよく見た。大丈夫。何も変かわらない。

たしかに何も変かわらなかった。見た目には何も変かわらない、興奮や、魅力ともなを伴ともなう立体感が抜けた、扁平へんぺいな景色だけが其所そこにあった。記憶の中の景色と夫それは一致した。然し一致することにより、自分は、此場所このにおいて興奮したことがあっただろうかと言うたう疑うたがいも生うまれ

た。

「多恵ちゃん」

誰かが多恵を呼んだ。

三十七

三人で振り向くと、合唱部の女子五人が寄り集まっていた。

「多恵ちゃんも来てたんだねー」

「言ってくれれば誘ったのに」

「空亜空ちゃんそのぬいぐるみ可愛いー今

取ったの？」

五人は文香達三人を囲んで嬌声を上げた。

多恵は躁然いだ様子でみんなと話し、空亜空

は取り急ぎ莞然と笑い、文香は一人でいた。

あから様に疎外された訳ではないが、誰も

文香に話し懸けなかった。五人は一通り盛り

上がると「またね」と手を振った。其中の一

人がちらりと文香を見た。冷たい目だった。

文香は喉笛を攫まれた。

息が、できない。当然だと思った。自分は突然合唱部に来て和を乱し突然合唱部から去った。何の為に来たのか、分らない。「あの子、声が浮いてるのよね」春江先生の声を思い出した。自分が、他から醜くく思われていたらと、初めて考えた。

「あああああ」

文香は直立した儘叫んだ。夫程大きい声ではなかったが、周囲にいた何人かは文香を見た。多恵と空亜空は驚ろいていた。醜くい人と醜くい私。文香は死にたいと思った、消えたいと思った。消えたいと思つて走り出した。どこへ行くかは分らない。川が浮んだ。凡てを呑み込んで流れそうな、暗い夜の川。
攫まれた筈の喉を攫んだ。攫むのは自分の手丈だった。息がでなかつた筈の喉は空気を通し、攫むと血液が押し返す。

月が輝かがやいていた。殆ほとんど欠けていない月は、吸い込まれそうな美うっくしさで、夜に浮うかんでいた。遮さえぎ切る雲はない。星は、いくつかしか見えない。照明が邪魔だ。壊して歩くには、数が多すぎる。

夜は蟬せみも眠っていた。代かわりに、鈴虫がもう鳴いている。美うっくしい歌う声。美うっくしい夜の月。自分だけが醜みにくかった。走った所せいで、息が乱れている。美うっくしい虫の歌を乱す。呼吸を止とめたかった。両手で喉のどを締しめると、苦しくて、咳せき込んだ。膝を突き、手を突くと唾よだが毀これる。唾よだを吐いた。土に滲しみみた。

川は、音もなく流れて、少しだけ照明に照らされる。黒い。どうして、自分このは此世界の一部になれないのだろうと思った。美うっくしいものになりたい。夫それが無理なら、美うっくしく生きたい。所ところが実際は只ただ醜みにくい丈だけだった。只ただ醜みにくい自分がいた。醜みにくい人間ゆるが免ゆるせない。だから自分も免ゆるせない。文香ふみかは歌った。

死ぬか殺す

どっち

どっちがいいの

憎むわ

人を

死ねよ

詫びろ

私に人よ詫びろ詫まり尽せ

すぐに私の番が来る

ガサリという音がした。空亜空だった。

三十九

「文香さん」

空亜空は左右一言々と、土の上に手を突いていた文香を立てせ、膝に付いていた砂を払った。すぐそばにあるベンチに座らせる。

文香の手を握って、文香のことを真面から見るが、文香はふらふらと据りの悪い首で川を見つめる。

空亜空は静かに言った。

「文香さん、私、私も、合唱部やめようと思えます。コンクールまでは、迷惑になつてしまうのでいますけど、其後はすぐにやめます。文香さんと一緒です。文香さん、私は、文香さんの味方です何があつても、誰が何て言つても。ここで文香さんの歌を聞いた時から、私は文香さんの理解者だつて、そう思つてます。文香さん、今の歌聞きました、つらかつたですね、苦しかつたですね、いいんです其まんま歌つても。寧ろ、心の暗が率直に表わされていて、テレビで見ると素敵です。魅力的です、ドルの歌よりずっと素敵です。魅力的です、文香さん、歌つて下さい好きなように、思つたように」

文香は空亜空の言葉を最後まで聞くと、川から空亜空へ目を移した。段々と焦点があつ

て空^そ亜^あ空^らの端^{たん}正^{せい}な顔^がが見^えると、突^と然^{ぜん}笑^わい声^が
が噴^ふき出^だした。甲^{かん}高^{だか}い声^で噎^むせるま^で笑^う、噎^む
せても猶^{なほ}笑^う。空^そ亜^あ空^らは茫^{ぼう}然^{ぜん}としていた。

「心^{こゝろ}の暗^{やみ}、そん^なの、知^らないよ。朝^あと夜^や
があるだけだよ、どこに行^いっても。私^{わたし}は、夜^よ
だけ好きな訳^{わけ}じゃない、朝^あの光^{ひかり}りにもなりた
いんだ。醜^{みに}くいだけの人^{ひと}は、嫌^{きら}だ、嫌^{きら}だ、き
れいになりたい、光^{ひかり}りになりたい、今^{いま}は夜^よし
かない、暗^くくて、見^みえない、苦^{くる}しいよ」突^と然^{ぜん}
息^{いき}がとま^つた。苦^{くる}しい。「苦^{くる}しいよ」涙^{なみだ}が出^で
てくる。「ど^うして」

空^そ亜^あ空^らはそ^とと文^ふ香^{みか}を抱^だき締^しめた。首^{くび}に両^{りょう}
腕^{うで}を回^{まわ}して、頬^ほを合^あわせる。涙^{なみだ}が、自^じ分^{ぶん}の頬^ほか
ら、空^そ亜^あ空^らの頬^ほに移^{うつ}ってい^くよ^うな気^きがした。
泣^なき声^{こゝろ}と、呻^{うめ}く声^{こゝろ}、鼻^{はな}をす^する音^ねは聞^きき苦^{くる}
しく、夫^{それ}でも虫^{むし}の歌^{うた}声^{こゝろ}と調^{てい}和^わした。

四十

多^た恵^えが、気^きを遣^{つか}い、買^かい物^{もの}へ行^いこうと誘^よつ

てくれた。此頃の文香は、常に茫としていて、どこを見ているのか分らない。一人でいる時は、発作を起した様に、突然胸を掻き毟る。其所為で胸が赤くなっていた。気に入りのワンプースを着た時、痛々しく赤らむ胸元が見えて、多恵が気遣わしげに視線を合したり外したりした。

多恵は母から文香を連れ出してやってくれないかと頼まれたらしかつた。

「三時まで部活だから、ちょっと待ってて」多恵に言われた文香は、制服を着て学校まで迎えに来た。部活が終るにはまだ時間があるし、音楽室で待つ訳にもいかないので、ふらふらと校内を歩いた。

日差が特別強い日だった。文香はすぐに汗をかけた。いくつも重なる蝉の合唱が、又暑さを掻き立てる。文香は日差を避けるために体育館へ這入った。今日は活動がないらしく、誰もいない体育館は寂として別の世界のようにだ。床に座ると冷やりとして気もちがいい。

壁を通して伝わる蝉せみの声は、又また別の美うつくくしさがあつた。

文ふみか香は夢を見ているように、茫ぼうとして小声で歌を歌つた。途中で、自分の醜みにくさを思い出し胸を搔かく。ひりひりと痛いたんだ。夫それでも、落ちつくとも又また小声で歌を歌つた。最近はどこで歌っているのかも、どう歌っているのかも、分わからない。胸の中が空洞くうどうで、其虚そのうつろから糸わづかに歌が生うまれる。其響そのきも空むなしいものだった。

「暑いなあ」

無ぶ料すいな声と俱ともに、体育館の鉄の引き戸が重く開いた。体育教師の増ます田だだった。手に持っているボードで、自分を扇あおぎながら入いってくる。文ふみか香は茫ぼうとした儘まま彼を眺ながめた。

四十一

増ます田だは文ふみか香から五メートルほど離れた位い地にどかりと腰おしを卸おろした。扇あおぐのもやめず、あぐらをかく。文ふみか香は視線を戻して又また小声で歌

った。文香ふみかの歌よりも、蝉せみの声の方が強く響いた。

「お前歌うまいな」

歌いやむと増田ますだがほめた。文香ふみかは又また茫ぼうと増田ますだに顔を向ける。反応しない文香ふみかに頓着とんちやくなく増田ますだは喋舌しゃべる。

「制服着てどうした。部活はいいのか」

文香ふみかは自分の制服を見て、顔を戻すと、ゆっくり喋舌しゃべった。

「やめました」

「そうか」

増田ますだは特に興味のない様子で答えた。

「おれはさ、バレー部の顧問なんだけど、うち弱いんだよなあ。覇気はきがないっていうのかな、まあ自分の時代と比べてるだけなんだけど、おれが学生ん時はもつとやる気あったんだけどなあ、部活おわ終っても自主練じしゅれんしてへトへトになってさ、まあ強い学校はほんと強いし、生徒の目の色も違うし、単におれの指導力不足か。そうだな」

増田ますだは一人で喋舌しゃべって一人で話はなしを終おわらせ
た。文香ふみかはふしぎそうに増田ますだを見ている。増田ますだ
は恥はずかしそうにガリガリと頭かを搔かいた。

「関根せきね、お前はあちこちで見えるなあ、大丈夫
夫つまなのか」

質問しつもんが漠然まくぜんとしていて何なにの事ことなのか分わからな
い。文香ふみかはほんの少し首かしを傾かげるが、増田ますだは夫
以上いじょう掘り下げようともせず体育館たいいくかんの窓まどを見て
いる。文香ふみかは

「先生せんせい」

と逆に増田ますだに問とい掛かけた。

四十二

「正しいって何なにですか」

増田ますだは面喰めんくらったように文香ふみかを見た。

「嘘うそは、悪いことは、いつかばれて、罰ばちが当あた
りますか。正しいことをすれば、いつか、い
いことが起おこりますか」

増田ますだはガリガリと頭かを搔かいた。

「難しいこときくなあ。おれは見ての通り頭悪いんだよ。体力だけでやってきたからなあ、だから、あんまり、いい事言えないけどいいか」

文香ふみかはゆっくり額突うなずいた。増田ますだは又窓またを見

た。
「おれは娘が小学生の時離婚しててさあ、最初は、月に一回ぐらい会ってただけど、娘が中学生になってから段々会わなくなった。娘が嫌がってんじゃないかって、思っちゃまったんだな元嫁さんもその頃再婚したし。今は高校生だろうなあ、お前みたいな大人おとなしの子だったよ。もう三年会ってない。

「数えてんだよなおれも、なら会いに行けばいいのに、勇気もないしなあ年頃の娘だと思うと、嫌なんじゃないかって考えちゃうんだよな、おれいい父親じゃなかったし。でももしも会えた時のことも考えるんだよ、おれは、いい父親じゃなかったけど、だから、いつ会っても娘から見下されるような人間には

なりたくないって、夫それがぎりぎりの、おれに取
つての正しいことかな。お前が求めてる答え
はこういうことじゃねえと思うけど。

「生徒に言うことじゃねえけどおれ元々事
なかれ主義だから、本当は面倒かかに係わりたく
ないんだよ、揉もめ事ごとなんて御免ごめんだし。でも、
教師だからさ、夫それで放はなつといたらおれ恥はずかし
い人間じゃねえかって、娘に会えないじゃね
えかって、今会えないんだけど考えるんだよ
な、そう考えなきや動けないんだからおれは
正しい人間ではないんだらうな、夫それにしたつ
ていつも思ってる訳わけじゃない、面倒事だから
係かかわらなかつた事あるよ、正直に言うけど。

「本当は生徒にこんなこと言うべきじゃな
いかもしれないけど、正しいことしたつてい
い事何もないんだよ。教える時は、いい事を
したら報いがある、誰かが見ていてくれる、
悪い事はばれる、其その罰なはいつか必かならず下くだるつ
ていうけどさ、四十年生きてきて思うのは本ほん
とかねえつてことだよな。正直に言うとき、

いいことしたらすぐ報われて欲しいじゃん、悪い事したらすぐ罰が当たって欲しいじゃん、左うすればみんな正しく生きるよな。でもなあ、悪い事したら夫に見合う丈の罰があるかどうかさえ怪しいんだよな、人殺して何年も懲役喰って夫で終りなのって、まあ出た後にも色々苦難があるだろうけど思うよ、其後其奴らのうのと生きるんじゃないかって、思うよ。

「正しいことをしたこと褒美なんてないんだよ。褒美を求めないのが正しいことなのかな、其所は分んねえけど、正しいことは人目に付きづらいから、誰にも見てもらえないし後でいいことが返ってくる訳でもないし自分で『おれはいいことしたぞ』って満足があるだけなんだよな、後でいいことあっても、夫は正しいこととは別のことだよ、セットだって考えない方がいい。何か話しずれてきたけど、お前は」

増田は文香を見た。

「もしそうでも、いいことなんか何もなくても、夫それでもお前は正しいことをするのかわつて、左そういうことだと思そうよ、正しいってのは」

文香ふみかは呼吸を忘れて増田ますだを見つめた。目が開ひらく。暫しばらくして漸ようやく息を吐くと、増田ますだは又窓を見た。

「すまん、訳分わけわかんなかったな」

蝉せみの声が聞きこえ始める。文香ふみかは、今の時間、別の世界にいたことに気づいた。

四十三

夏休みが終おわって、新学期が始まった。依然いぜんとして暑い。合唱部は県のコンクールに出場し、銅賞を得たということだった。空そ亜あ空らは合唱部を退やめた。

多た恵えと一緒に帰ると、頻しきりに今嵌はま入まっているアイドルの話はなしをした。塾の講師で、一期熱を上げていた諸星もろぼしという先生に、彼女が

いることが発覚したらしく、其話^{そのはな}しは最近聞かない。文香^{ふみか}は其^{その}アイドルの魅力について、真剣^{まけん}に聞き領突^{うなず}いた。

二人とも一度家に帰り、着替^{きが}えると、文香^{ふみか}は先に一人川^{かわ}に向^{むか}った。青空には、雲^{うみ}が浮^{うか}んでいて、美^{うつく}しい。文香^{ふみか}は川^{かわ}べりで暫^{しば}らく空を見上げていた。

お気に入り^{お気に入り}のベンチのそばには、食べ終^{おしま}えたビニールのパンの袋^{ふくろ}が落ちていた。醜^{みにく}いものを見て、憎^{にく}しみを覚^{おぼ}える。拾^{ひろ}って、座^まり、両手^{りょうて}で袋^{ふくろ}をもった。

くしゃくしゃと袋^{ふくろ}をもんで、又^{また}空^{そら}を見た。川^{かわ}にも目を移^{うつ}すと、光^{ひか}が反射^かして光^{ひか}り輝^{かが}やいている。光^{ひか}りがさすけど、光^{ひか}っているのは私^{わたし}じゃない。文香^{ふみか}は小さく歌^{うた}を歌^{うた}った。

ごみ拾^{ひろ}いをするおじさんが歩いて来た。長いトン^{とん}グを持って、もう片^{ひと}方の手^てで持^もつ大きいごみ袋^{ごみぶくろ}に落^おちているゴミ^{ごみ}を入れる。市^しの清掃^{せいじょう}員の格^{かく}好^{こう}をしていた。おじさんは文香^{ふみか}と目^めが合^あうと、文香^{ふみか}の手^て許^{もと}を見て、袋^{ふくろ}を差^さし出^だす。

「捨てる？」

文香は袋を捨て、一生懸命笑うと、深く頭を下げた。

「ありがとうございます」

おじさんは照れくさそうに「おう」と笑って又歩いて行つた。

又空を見上げると、いつ来たのか飛行機雲が残っていた。何か美しくくないものを見た気がして、憎しみが湧いたが、夫と是とは別だとも思う。

声が糸かに聞えて振り返ると、笑つた空亜空が手を振ってこちらに向つている。多恵も一緒にいてゆっくりと歩く。文香は立ち上つた。

空と、川に向つて、静かに歌う。